

Nhd. **の**mit einem Stein werfen**の**語法を古ゲルマン語に探る

その他のタイトル	Herkunft einer gegenwertigen Redensart, (wie; mit einem Stein werfen) und des Dativs hierbei in den altgermanischen Sprachen an der Stelle einer Proposition zm Neuhochdeutschen
著者	手嶋 竹司
雑誌名	独逸文學
巻	40
ページ	1-17
発行年	1996-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018220

Nhd. の *mit einem Stein werfen* の 語法を古ゲルマン語に探る

手 嶋 竹 司

古ゲルマンの諸語の動詞に共通の現象として一つの特徴的な語法のあることを指摘し、そのよってきたところのそもその淵源と由来を考えてみたいと思う。

それは動詞にまつわる一連の現象である。現代語の視点からするならば、当然それらの動詞は対格の補足語もしくは前置詞つきの補足語をとると考えられるのに、これらが古ゲルマン語においてはそのほとんどが表題にかかげたように与格の補足語をとっているという事実である。ここに見る与格というのは古くは具格に遡ることができるように思うが、そのことについては後ほどの考証のなかで検討し説明されるであろう。まずはそれらの動詞とはどのような動詞であるのか、その特徴を挙げておこう。それは現代のドイツ語でいうならば、

werfen (throw) (括弧のなかにあげたのは現代英語の動詞)
schießen (shoot)
schwingen (swing)

に当たるような動詞である。いまこれらの動詞は現代ドイツ語ではひとつには自動詞として前置詞つきの補足語をとるか、さもなければ他動詞として当然のごとく対格補足語を目的語にとるのが一般である。現代英語の方ではこれらの動詞は他動詞として扱われている。これをドイツ語に例をとってみると、

mit einem Stein werfen (石を投げる)
mit Pfeil und Bogen schießen (弓矢を射る)
mit Geld schmeißen (お金を投げる、ばらまく)
mit (*od.* in) Lebensmitteln handeln (食料品を商う)

mit dem Kopf schütteln (頭を横に振る)
an der Tür rütteln (ドアを揺すぶる)
am Lenkrad drehen (自動車のハンドルを回す)
現代英語のほうにも例えば、

treat with ~	(~を扱う)
deal with ~	(~を処遇する)
do with ~	(~を処置する)
begin with ~	(~を始める)
break with ~	(~を中止する)
deal in ~	(~を商う)

現代ドイツ語でも

mit der Arbeit anfangen (仕事を始める)

など現代ではほとんどはどちらかと言えば他動詞として扱われることの多い動詞ではあるが、それが自動詞としての機能をたもっているような場合には上のように前置詞を伴って使われるのが一般的であり、また慣用的である。

いまこれらの動詞について古ゲルマン語の状態を調べてみるならば、次のように古くは与格の補足語をとって現れるのである。その用例からみても、

A) 現代ドイツ語の *werfen* に当たる動詞

ゴート語

Mc. 11, 23

wairp þus in marein (海に身を投げよ)

Mt. 27, 5

atwairpands þaim silubreinam in alh aflaiþ

(銀貨を寺のなかに投げ込んで、立ち去った)

Mc. 12, 4

stainam wairpandans (石を投げて)

古英語

Beowulf. 2580ff.

beorges weard..... wearp wæl-fýre, wide sprungon hilde-

lēoman (塚の主=墓守は劫火を投げて、竜の吐く戦いに挑む火は遠く飛び散った)

古アイスランド語

Skm. 40

segðu mér þat, Scírnir, áðr þú verpir söðli af mar

(スキルニルよ、馬から鞍を投げる = 馬から降りる前にそのことを私に言うておくれ)

Sd. 8

full scal signa ... verpa lauki í lög

(なみなみと注がれた杯を祓い清め、蕪をビールの中に投げ入れるように)

Rm. Einleitung. 18ff.

hann kom til Ránar kastaði netino fyrir geddonna ;

(彼はランのところへやってきて、川鱒の前に網を投げた)

Möbius: Altnordisches Glossar. S. 106

fleygja eldi upp at húsunum (火をその家に向けて放り上げる)

古サクソン語

Hel. 2519ff.

bethiu thar wahsan ni mag that hêlaga gibod godes, thoh it thar ahafton mugi, wurtion biwerpan

(だからそこでは神の聖なる教えもそこにしっかりと地につこうとしても、大きく育ち根づくことはできない)

★比較参照：Nhd. *Wurzeln schlagen* (根づく)

B) 現代ドイツ語の *schießen* に当たる動詞

古アイスランド語

Gordon: Introduction to old Norse. II. Zeile 106f.

nu skýtr Sinfjöltli blóðreflinum fyrir ofan helluna

(さてシンフィオルティは平らな岩の上を刀の先でたたく)

Gör. II. 18

hverr fara vildi ... qrom at scióta

(誰が出かけて行って矢を射ることをのぞむであろうか)

☆なお次のような現代ドイツ語と比較されたい。

mit dem Bogen schießen (弓を射る)

mit dem Gewehr schießen (銃を発射する)

C) 現代ドイツ語の *reiten* に当たる動詞

古アイスランド語

Möbius: Altnordisches Glossar. S. 346

Þessum (=hesti) reið Þórir yfir Þorskafjörð

(ソーレルは馬に乗って鱈湾を越えた)

Gör. II. 18

hverr fara vildi ... hesti riða

(誰が馬に乗ってでかけようと思うだろうか)

Rm. 16

hverir riða þar Rævils hestom hávar unnir?

(誰がラフェウルの馬で高波を乗り越えていくのか)

古英語

Beowulf. 853ff.

þanon eft gewiton eald-gesiðas, swylce geong manig of gomen-
wāþe, fram mere mōdge mēarum riðan

(長年の同輩たち、それにまた多くの若者が楽しい旅より、勇気ある
ものどもは海から出て馬でそこから去った)

Beowulf. 234f.

gewāt him þā tō waroðe wicge riðan þegn Hrōðgāres

(フロズガールの戦士たちは、岸辺に馬を駆って行った)

D) 現代ドイツ語の *walten* (支配する, 操る) の意味をもつ動詞

ゴート語

LK. 3,14

ni mannanhun anamahtjaid jah waldaiþ annom izwaraim

(いかなる人にも暴力をふるわず、汝らの自分の給料を操るようにせよ = 給料で足るようにせよ)

古アイスランド語

Grm. 13

þar Heimdall qveða valda véom

(そこでは Heimdal が聖なるところ = 神殿をほしいままに操っていると
言われている)

古英語

Beowulf. 2038

þenden hie ðam wæpnum wealdan mōston

(彼らが武器を操ることのできるうちは)

Genesis B. 1377

sē ðe wætrum weold (水をほしいままになしうる人)

Genesis B. 2003ff.

hæfde wigsigor Elamitarna ordes wisa, weold wælstōwe

(エラミタルの軍隊の統率者が勝利を得て、戦の庭をほしいままに
した)

古サクソン語

Hel. 1320f.

quað that ôc sâlige wârin thie rincos, the rehto weldin,

(彼は、正義を操る人は至福の人であると言った)

E) 現代ドイツ語の *zügeln* の意味をもつような動詞

古アイスランド語

Vkv. 16

hon inn um gecc ennlangan sal, stóð á gólfí, stilti røddo

(彼女は広間に向かって中へ入って、床に立って言葉を和らげた)

古高ドイツ語

Otfrid. III. 19, 20

er wolta in io mit willen mammonto gistillen

(彼は心から進んでかれらの気を和ませようと思った)

F) 現代ドイツ語の *rudern* に相当する動詞

古アイスランド語

Hrbl. 53

ró þú hingat bátinom (汝、こちらへ船を漕いでこい)

G) 現代ドイツ語の *schlagen* に当たる動詞

古アイスランド語

Dr. Einleitung. pr. 16f.

hann sló hǫrpo oc svæfði ormana

(彼は豎琴を叩いて蛇を眠らせた)

古サクソン語

Hel. 2183f.

thiu mōder aftar geng an iro hugi hriwig endi handun slōg

(母は心のうちに悲しい思いをして後からついていき、手を叩き振り絞った)

☆ Heliand にはこの動詞の場合に次のように前置詞の用いられている例もある。

3498f.

he slehit..... an is breost mid bēðiun handun

(彼は自分の胸を両手で叩いた)

これまでの例文に挙げた動詞の種類からも推測されるように、与格の補足語を必要とし、これもまた上の例、とりわけ現代ドイツ語の動詞として掲げたものからも予測されることと思うが、この与格は現代語に直すとすると、どうしても他動詞的に「.....を」と対格的に訳さざるをえない。勿論これらの動詞は現代語では他動詞としてあつかわれてもいる。しかしそれは歴史を下ってからのことである。古い言語では今日のように自動詞と他動詞の区別は近代語に見るほどには截然としてはおらず、明確ではなかったようである。

さらにこれらの動詞の特徴として以下のことが考えられる。すなわち動詞の表すところの動作は、その動作、行為には道具というものを使用することによってその目標を達成することが可能になるということを共通点としてもっていることが想定される。そのことを次のような例文が傍証してくれているように思う。

古英語

Beowulf. 2439f.

his mæg ofscēt, brōðor oðerne, blōdigan gære

(血で汚れた槍で自分の身内のもの、もう一人の兄弟をあやめた)

Beowulf. 2880f.

þonne ic sweorde drep ferhð-geniðlan

(私は刀で不倶戴天の敵を殺害した)

Der Überfall in Finnsburg 13

gyrde hine his swurde

(刀を帯びた)

Genesis B. 2864f.

hine sē halga wer gyrde grægan sweorde

(その高貴な方(アブラハム)は灰色の刀を身につけた)

古アイスランド語

Grp. 15

pú munt hōggva hvōsso sverði, brynio rísta

(汝は鋭い刀で鎧を引く裂くであろう)

古高ドイツ語

Tat. 185. 1

oba wir slahemes in sverte

(もしわたし達が刀で彼をやっつけるならば)

参照.....古アイスランド語

Gör. II, 19

langbarðz liðar.....scálmom girðir

(長い髭をした人(=アトリ)の兵士たち、しかも刀剣を身につけた兵士どもは)(*girðir* は *gyrða* の過去分詞複数主格形で *liði* (*Krieger*) の複数主格 *liðar* にかかっている.)

これらの例文からは、「投げる」、「殺害する」、「操る」といったような動作をするのにはなにか目標とするものが必要であり、その目標を実際に物にするためには当然のこととして手段とか、方法といったものに想いが及ぶのである。その時の手段なり方法なりを表すのがここにみるところの与格であり、そして手段、方法ということからは必然的に思い出されるのは具格のことである。そのような理由から、次のようにこの与格は時に前置詞、なかでも *mit* (*with*) などが適切な前置詞として選ばれることになる¹。

古アイスランド語

Baetke: S. 217

gyrðr sverði (刀を帯びる)

Cleasby/Vigfusson/Craigie: Icelandic-English Dictionary. S. 221

hann gyrði sik með dúki

(彼は衣を身にまとった)

こうしたことから現代語において、これらの動詞と血縁関係にある現代語の動詞がそうした前置詞補足語をとることの歴史的背景をいまここに見ることができるというも、強ち過言とは言えないように思う。さらに古ゲルマン語にも早くからこれらの動詞が、ここに言う手段とする名詞の格を対格にしている用例がみつかるのである。例えば現代ドイツ語の *werfen* に当たる動詞の場合についてみるに、

古サクソン語

Hel. 1486f.

is erlo gehwem ôðar betara, firrho barno, that he ina fram werpa (人の子の誰にとっても、その人はそれ = 四肢の一部を投げ捨てる方がましである)

古高ドイツ語

Otfrid. II. 11, 21

werfet..... thiz hina ûz (汝らそれを外に投げ捨てなさい)

古サクソン語と古高ドイツ語の文献では Hildebrandslied のほかには与格の例はほとんど見あたらず、上の Otfrid にみるように対格をとっている。ところが古英語の Beowulf になると、A) のところに挙げたのは、与格が使われていたのに対して次のように対格の用例もみられるのである。

Beowulf. 1531f

wearp ðā wunden-mæl wrættum gebunden yrre öretta

(腹をたてた戦士は、工芸品の飾りのついた剣を放り投げた)

ゴート語にも同じような与格に代って対格の使われている例がある。

ゴート語

Lk. 5, 5

afar waúrda þeinamma waírpam natja

(われわれはお前の言葉に従って網を投げおろす)

これまでに見てきたように、「投げる」、「操る」、「射る」などの動詞とともに用いられた与格というのは、これまでの考察と検証から見て本来的には具格に遡及できるものであることは強ち否定できないように思う。しかしそうした事情の中にあって実際の具体的な使用が格の Synkretismus (融合) と相俟って、いま直前に挙げた例文にみるようにその道具や手段、方法が次第にその動作の対象になり変わっていった。その結果ときにはその与格が対格になったり、ときには昔の与格の感覚が残って前置詞つきの補足語をいまに引きずっているとみることができないのではないだろうか。

更にいま一つこの辺の事情を傍証するような例文を挙げておこう。

古アイスランド語

Rp. 35

(nam Iarl) hestom ríða, hundom verpa, sverðom bregða,

(イアールは馬にまたがり、犬をけしかけ、刀を振り回そうとした)

ここ古アイスランド語ではいずれの動詞も与格 (複数)、すなわちかつての具格を補足語にしている。またこれを古英語にみるに

Beowulf. 2702ff.

þā gēn sylf cyning gewēold his gewitte, wæll-seaxe gebræd,
biter ond beadu-scearp

(王ご自身は意識を取り戻し、切れ味も鋭い短刀を抜いた)

と gewældan (nhd. *walten*) も gebregdan (nhd. *schwingen, ziehen*) もともに与格 (具格) を補足語にしてはいるものの、wæll-seaxe にかかって後続する形容詞の方は biter と beadu-scearp はともに対格に置かれている。ところが古高ドイツ語並びに古サクソン語の方ではともにこれらの動詞は対格を支配している。

古高ドイツ語

Otfrid. IV. 17, 1

Pêtrus ward es anawert joh bratt er sliumo thaz swert

(ペトロはそれに気づき、すぐさま刀を鞘から引き抜いた)

古サクソン語

Hel. 1176f.

sâtun im thâ gesunfader an ênumu sande uppen, brugdun
endi bôttun bêðium handun thiu netti niudlîco

(父と息子の二人は砂の上に腰を下ろし、両手を使って力を込めて、
漁網を編んだり修理した)

こうした例文にみられる与格と対格の交錯した用法のなかからも上に述べた具格に遡る与格から次第に具格のもつ手段、方法といった言語感覚は失われて、元来は手段であったものが動詞の目的語へと推移していった様子を、ここに窺い知ることができるように思われる^{2,3,4}。

因みにいまここにしばらく敢えて人の与格を補足語にとる動詞の場合について付言しておこうと思う。まずこの辺の事情を考察するに当たり、そのような例文からみてみることにする。例えば新高ドイツ語の *drohen* のような動詞では、

ゴート語

II. Thess. 1, 6

þaim gápreihandam izwis (*Dativ*)

(汝らに苦難を加うるものたちに)

古アイスランド語

Möbius: Altnordisches Glossar. S. 458

hann þröngði undir sik þeim til þingmanna (*Dativ*)

(彼はその人たちをくだして自分の配下(民会のもの)にした)

Baetke: Wörterbuch zur altnordischen Prosaliteratur. S. 787

dyrit þröngdi honum svá fast at varla fekk hann hrærðan sik
(*Dativ*)

(その動物が非常に力強く彼を押さえつけたので、彼はほとんど身動きができなかった)

古英語

Genesis B. 138f.

him arn on læst, þrang þýstre genip þām þe sē þeoden self
sceop nihte naman (*reflexiver Dativ*)

(背後に暗闇が押し迫り、神ご自身はそれを夜とお名付けになった)

古高ドイツ語

Tatian. 92, 6

threwita themo unsûbremo geiste (*Dativ*)

((彼 = キリストは) 汚れた霊をどやしつけた).

Otfrid. I. 1, 89

ther worolti sô githrewita, mit swertu sia al gistrewita

(*Dativ*)

((アレキサンダーの親族のものが) 世の人々を脅して、刀でもって彼らをみな殺害した)

ここに挙げた動詞はすべて語源的には新高ドイツ語の *drohen* と同根の動詞であり、なおここにみるようにこれらの動詞は人の与格を補足語にとっている。そしてそのことは現代の新高ドイツ語にまで変わることなく受け継がれている。しかしこのことは取りも直さず、与格が人の格とも称せられるが、そのような特性を史的展開の過程で漸次強めていくのに平行して、与格そのものの機能をより鮮明にしていくという歴史的な背景と併せて、人が具格にたつということが極めて稀有であるという事情に因るものと考えられるのである。

注

- 1 さらに次のゴート語の例文にもその辺の事情を窺い知ることができるように思われる。

Mc. 15, 20

jah gawasidedun ina wastjom swesaim

(そして彼らは彼に不断着を着せた)

Mc. 6, 9

ni wasjaip twaim paidom

(汝らよ下着を二枚着るな)

言うならば、ここゴート語にも他のゲルマン語にみられるのと同じ現象のあることを認めることができる。

- 2 古ゲルマン語のなかで具格の機能をもつ与格をいちはやく失ったのが古高ドイツ語である。古高ドイツ語においても前置詞と結びつく場合の指示代名詞はこの具格の形はかなり明確に保存されてはいるが、それ以外の一般の名詞に関し

ては殆どその面影をとどめてはいない。次に挙げる例文からもそのことを窺い
知ることができる。

古高ドイツ語

Hildebradslied. 5

garutun se iro gûðhamun, gurtun sih iro svert ana

(彼ら = ヘリブランドとヒルデブランドの親子は鎧と甲に身を整え、刀を
腰にさげた)

古アイスランド語

Baetke: S. 217

gyrðr sverði (nhd. *mit dem Schwert umgürtet*. 刀を身につけて)

古英語

Finnsburg. 13

gyrde hine his swurde

(nhd. *gürtet sich mit seinem Schwert* 刀を腰につけて)

Beow. 1441f.

gyrede hine Beowulf eorl-gewædum

(nhd. *kleidete sich mit der Rüstung*

(ベーオウルフは) 武具を身にまとった)

これらの例からみて、古アイスランド語および古英語では「身にまとう」とい
う動詞においては直接目的語としては再帰代名詞を、そして「身につける武
具」のほうは具格(与格)におかれている。これにたいして古高ドイツ語のほ
うでは対格に立っている。これからみても、ドイツ語はかなり早い時期に具格
にかえて対格をおくようになったものと考えることができる。

この辺の事情を物語るもう一つの例証を挙げておこう。

ゴート語

Lk. 17, 29

rignida swibla jah funin (*Dativ*) (空から硫黄と火が降ってきた)

古アイスランド語

Cleasby, Vigfusson, Craigie: S. 497

rignir eldi ok brennu-steini (*Dativ*) (火と硫黄が降り注ぐ)

Baetke: S. 501

rignir blóði (*Dativ*) (血の雨がふる)

古高ドイツ語

Tat. 147, 2

regenôta flur inti swebal fon himile (*Akkusativ*)

このように聖書の中の同じ箇所のことと思われる部分が古高ドイツ語においては対格であるのに対して、ゴート語及び古アイスランド語では与格が用いられている。なおゴート語の原典であるギリシャ語の方では、このところは対格が使われているのをみてもこの具格 (= 与格) の用法は古ゲルマン語に本来的な用法とみてよいであろう。

さらに古サクソン語から例文を拾うならば

Hel. 3129ff.

Elias endi Moyses quâmun thar te Criste wið sô craftagne wordun wehslean

(エリアとモーゼの二人が、大きな力の持ち主であるキリストと言葉を交わすために、キリストのいるところへやってきた)

★比較参照 : Nhd. *mit der Wohnung wechseln* (住居を変える)

Hel. 5706

liet wâpnes ord wundum sniðan (武器の先をして傷を切断させた)

- 3 Leisi, E.: Der Wortinhalt. S. 67. 1971. UTB. 96

Englisch *poke, prod*, deutsch *stochern haben spitziges Medium* (grammatisch oft Objekt) zur Bedingung.

(英語の *poke* (火をつつつく), *prod* (つく (及びドイツ語の *stochern* (火をかきまわす) はとがった道具 (文法的にはしばしば目的語) を使うことを条件としている。) (鈴木孝夫訳 : 意味と構造, 講談社学術文庫1135. 1994. 150ページ) (下線は手嶋)

- 4 このことは次のドイツ語と英語の表現形式の相違にも認めることができる。

現代ドイツ語.....mit den Schultern zucken

現代英語.....shrug one's shoulder

この意味するところはともに「肩をすくめる, 肩をすぼめる」ということであって, ドイツ語の方は動かす肉体の一部を道具もしくは手段としているが, これに対して英語の方では同じ肉体の一部を動詞の表す動作の対象として把握している。ドイツ語にも英語のように肉体の一部を動詞の対象とした言い回しがないことはないが,

die Achsel zucken

慣用的には自動詞として前置詞を使った先の言い回しの方が多く用いられる。

ここにも昔の具格の 残照が尾をひいていると見ることができる。(Leisi, E.: 前掲書 54ページ参照)

略 語 説 明

ゴート語関係

- Lk.....福音書ルカ伝 (Evangelium des Lukas)
Mc.....福音書マルコ伝 (Evangelium des Markus)
Mt.....福音書マタイ伝 (Evangelium des Matthäus)

古アイスランド語関係

- Dr.....Dráp Niflunga (ニヴルン族の殺戮)
Grm.....Grímnismál (グリームニルの歌)
Gr.....Guðrúnarqviða (グズルーンの歌)
Hrbl.....Hárbarðslióð (ハールバルズの歌)
RmReginismál (レギンの歌)
Sd.....Sigdrífomál (シグルドリーヴァの歌)
Skm.....For Scírnis (スサールニルの旅)
Vkv.....Völundarqviða (ヴェルンドの歌)

古英語関係

- Genesis B.....die ältere Genesis

参 考 資 料

I. 刊 本

1. *Althochdeutsches Lesebuch*, hrsg. von W. Braune, fortgeführt von K. Helm. 14. Aufl., bearb. von E. A. Ebbinghaus Tübingen 1962.
2. *Althochdeutsche Literatur*, hrsg. von H. D. Schlosser. Fischer Bücherei. Bücher des Wissens. Nr. 6455. Frankfurt 1980.
3. *Beowulf*, hrsg. von Else von Schaubert. 1. Teil: Text. München. Paderborn. Wien. 1963.
4. *Die ältere Genesis*, hrsg. von F. Holthausen. Heidelberg 1914.
5. *Die gotische Bibel*, hrsg. von W. Streitberg. Heidelberg 1950.
6. *Edda*. die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern, hrsg. von Gustav Neckel. 1. Text. 4. umgearbeitete Auflage von Hans Kunn. Heidelberg 1962.
7. *Heliand*, hrsg. von Otto Behaghel. 8. Auflage, bearbeitet von Walther Mitzka. ATB. Nr. 4. Tübingen 1965.
8. *Otfrids Evangelienbuch*, hrsg. von Oskar Erdmann. 6. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff. ATB. 49. Tübingen 1973.

9. *Tatian*, lateinisch und althochdeutsch, hrsg von Eduard Sievers. 2. neubearbeitete Ausgabe. Paderborn 1892.

II. 辞 書

1. Baetke, W.: Wörterbuch zur altnordischen Prosaliteratur. Akademie-Verlag. Berlin 1965.
2. Beowulf. 3. Teil: Glossar, hrsg. von Else von Schaubert. München. Paderborn. Wien 1963.
3. Braasch, Th.: Vollständiges Wörterbuch zur sog. Caedmonischen Genesis. Heidelberg 1933.
4. Cleasby, R./G. Vigfusson: An Icelandic-English Dictionary. Oxford 1945.
5. Gering, H.: Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda, hrsg. Von Sijmonds, B./H. Gering. Halle 1903.
6. Möbius, T.: Altnordisches Wörterbuch. Darmstadt 1963.
7. Schützeichel, R.: Althochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1969.
8. Sehrt, E. H.: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur alt-sächsischen Genesis. Göttingen 1966.

III. 参考文献

1. Erdmann, O.: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. Halle 1874.
2. Heusler, A.: Altisländisches Elementarbuch. Heidelberg 1967.
3. Holthausen, F.: Altsächsisches Elementarbuch. Heidelberg 1899.
4. Mitchel, B.: A Guide to Old English. Oxford 1971.
5. Quirk, R./G. L. Wrenn: An Old English Grammar. London 1977.
6. Streitberg, W.: Gotische Syntax, hrsg. von Hugo Stopp. Heidelberg 1981.
7. Weimann, K.: Einführung ins Altenglische. UTB. 1210. Heidelberg 1990.
8. Wright, J.: Grammar of the Gothic Language. Oxford 1949.

(本稿は1995年5月、日本独文学会第49回研究発表会にて発表した原稿を加筆修正したものである)

*Herkunft einer gegenwärtigen Redensart,
(wie ; mit einem Stein werfen) und des
Dativs hierbei in den altgermanischen
Sprachen an der Stelle einer Präposition
im Neuhochdeutschen*

Takeshi TESHIMA

Es ist heute üblich, daß im Neuhochdeutschen und modernen Englisch Verben wie *werfen*, *schießen* oder *anfangen* (*throw*, *shoot*, *begin*) im allgemeinen zu ihrer Ergänzung entweder ein Objekt im Akusativ oder eine Ergänzung mit einer Präposition haben, dagegen in den altgermanischen Sprachen für gewöhnlich ein Objekt im Dativ hatten. In den altgermanischen Sprachen können wir den Dativ meistens ursprünglich wohl weiter auf den früheren Instrumental zurückführen.

Im Neuhochdeutschen und modernen Englisch wird bei diesen Verben im Verlauf der Sprachentwicklung der transitive Gebrauch immer vorherrschender, doch manchmal werden sie auch intransitiv gebraucht, besonders dann, wenn diese Verben einen Gegenstand als Handlungsmittel zum Erzielen der Wirkung fordern. Dabei wird eine bestimmte Präposition üblicherweise von einem Nomen gegenständlichen Inhalts begleitet. Der Bedeutung nach ist bei diesen Verben die Verbalhandlung oder ihre Wirkung imstande, erst durch die Anwendung eines Gegenstands verwirklicht und ausgeführt zu werden.

Dieser Dativ, der in den altgermanischen Sprachen bei den Verben wie „*schießen*, *werfen usw.*“ vorkommt, geht hinsichtlich der Bedeutung wie auch der Funktion auf den gemeingermani-

schen Instrumental zurück. Die angeführten Beispiele legen uns die eigentliche Herkunft nahe.

Historisch gesehen, tritt bei diesem Dativ-Gebrauch das Bewußtsein des Dativs allmählich in den Hintergrund. Somit tritt die Wahrnehmung des Akkusativs als direkten Objekts — und nicht Instrumental als Mittel — im Verlauf der Zeit allmählich in den Vordergrund, andererseits bleibt das Gefühl von der Herkunft. Dies bewirkt, daß hier eine Präposition angewendet wird, um den früheren instrumentalen Gebrauch wieder von neuem zum Ausdruck zu bringen. Es ist auch nicht zu leugnen, daß hierbei die Kasus-Vermischung mitwirkt.